

第十二回「言の葉大賞」応募作品審査を振り返って

一般社団法人言の葉協会 代表理事 佐藤典司

今年もまた、応募総数二六、四五三点というたくさんのご応募をいただき、心より感謝申し上げます。そして、コロナ禍という厳しい社会状況の中、変わらぬみなさまの御熱意を主催者としてたいへんうれしく思います。

今年の作文テーマは「道」でした。通学路や旅先での思い出の道といった具体的な道について書かれたものや、おけいこ事やスポーツなどの「道」に励む様子について書かれた作品などさまざまでした。そうした中、すぐれた作品に共通していたのは、ふだん歩いたり眺めている通りや、あるいは毎日励んでいる活動の中に、よく目を凝らすと、それまでとは違った新たな発見をした、という作品でした。いつもならごく当たり前と思っていたものが、当たり前でなくなる、そういう感動や驚きにあふれた作品が、読み手の側にも伝わってきました。

こうした発見の機会にもさまざまなお話があげられていました。進学先の決定、家族や親友との交わり、生徒思いの先生との出会い、病気やまたそこから立ち直った

経験、それらがあらためて、道を見直し、感じさせてくれるきっかけとなったようでした。

そういった意味で、今回のテーマ「道」は、いわば道端に転がっている何のへんてつもない石ころに、新たな価値を見出すきっかけをみなさんに与えたのでは、と感じています。

加えてこのことは、作文という創作行為の方法論だけでなく、生きて行く上で、何事でも目を凝らしてもう一度よく見てみると、そこに新たな意味、新たな価値の発見があるという、人間としての生き方に通じるものがあると言つてよいでしょう。

コロナ禍にかぎらず、長い人生のうちでは、さまざまな試練や、逆に退屈きわまりない日常を過ごさなければならぬ機会に遭遇します。そんなときにあつても、いつもの道を見失わず、また平々凡々とした道にも新たな発見をする力こそ、今、必要とされるように思います。